

集合論ノート 0007

Δ -システム補題 (Delta System Lemma)

近藤友祐 (@elecello_)

初稿: 2018/03/08 微修正: 2017/03/26

この文書の場所: <https://elecello.com/works.html>

初等的部分モデルを用いた見通しの良い証明もありますが(今度書くかも?), ここでは愚直にやります。

定義 1. 集合族 \mathcal{A} が Δ -システムであるとは,

$$\exists r \forall x, y \in \mathcal{A} (x \neq y \rightarrow x \cap y = r) \quad (1)$$

が成り立つことをいう。集合 r は Δ -システム \mathcal{A} の根と呼ばれる。

定理 2. κ を無限基数, $\theta (> \kappa)$ を正則基数で $\forall \zeta < \theta (|\zeta^{<\kappa}| < \theta)$ が成り立つものとする。このとき, 条件 $|\mathcal{A}| \geq \theta, \forall x \in \mathcal{A} (|x| < \kappa)$ を満たす任意の集合族 \mathcal{A} に対して, $|\mathcal{B}| = \theta$ なる Δ -システム $\mathcal{B} (\subseteq \mathcal{A})$ が存在する。

Proof. $|\mathcal{A}_0| = \theta$ なる $\mathcal{A}_0 \subseteq \mathcal{A}$ を任意にとり固定する。定理の仮定より, $\bigcup \mathcal{A}_0$ は濃度 $< \kappa (< \theta)$ の集合の θ 個の和なので, $|\bigcup \mathcal{A}_0| \leq \theta$ である。よって, 単射 $j: \bigcup \mathcal{A}_0 \hookrightarrow \theta$ がとれる。 \mathcal{A}_0 の任意の要素 x について, $j[x] \subseteq \theta$ は整列集合であり, 定理の仮定より $\text{type}(j[x]) < \kappa$ が成り立つ(ここに $\text{type}(\cdot)$ は整列集合の順序型を表すものとする)。各順序数 $\gamma < \kappa$ に対し, $\mathcal{A}^{(\gamma)} := \{x \in \mathcal{A}_0 : \text{type}(j[x]) = \gamma\} (\subseteq \mathcal{A}_0)$ と定める。

Claim 1. $\exists \gamma < \kappa (|\mathcal{A}^{(\gamma)}| = \theta)$.

[.] 背理法。 $\forall \gamma < \kappa (|\mathcal{A}^{(\gamma)}| \neq \theta)$ とする。 $\forall \gamma < \kappa (\mathcal{A}^{(\gamma)} \subseteq \mathcal{A}_0)$ なので, $\forall \gamma < \kappa (|\mathcal{A}^{(\gamma)}| \leq \theta)$ である。したがって $\forall \gamma < \kappa (|\mathcal{A}^{(\gamma)}| < \theta)$ となる。すると

$$\theta = |\mathcal{A}_0| = \left| \bigcup_{\gamma < \kappa} \mathcal{A}^{(\gamma)} \right| < \theta \quad (2)$$

となって矛盾する。ここに, 右辺の不等号は, その左辺が濃度 $< \theta$ の集合の $\kappa (< \theta)$ 個の和であり, κ が正則基数であることから, [?] の定理 I.13.11(1) により従う。 \square (Claim 1)

Claim 1 で存在が保証される γ のうちの一つを適当に固定し, γ_* とする。その上で \mathcal{A}_1 を以下に定める:

$$\mathcal{A}_1 := \mathcal{A}^{(\gamma_*)} (= \{x \in \mathcal{A}_0 : \text{type}(j[x]) = \gamma_*\} \subseteq \mathcal{A}_0 \subseteq \mathcal{A}). \quad (3)$$

Claim 2. $j[\bigcup \mathcal{A}_1]$ は θ で非有界である。すなわち, $\forall \alpha < \theta \exists \beta \in j[\bigcup \mathcal{A}_1] (\alpha \leq \beta)$.

[.] α を任意にとり固定する。まず, 仮に $\forall x \in \mathcal{A}_1 (j[x] \subseteq \alpha)$ ならば, $|j[x]| < \kappa$ に注意して,

$\forall x \in \mathcal{A}_1 (j[x] \in [\alpha]^{<\kappa})$. よって $\{j[x]: x \in \mathcal{A}_1\} \subseteq [\alpha]^{<\kappa}$. 両辺の濃度を計算する. 左辺について. j の単射性と $|\mathcal{A}_1| = \theta$ に注意すると, 左辺の濃度は θ . 右辺について. $\alpha < \omega$ のとき有限となり, 矛盾. $\alpha \geq \omega$ のとき. $\aleph_0 \leq \kappa \leq |\alpha|$ なら, 定理の仮定を用いて $||[\alpha]^{<\kappa}| = |\alpha|^{<\kappa} = ||\alpha|^{<\kappa} < \theta$. これも矛盾. $|\alpha| < \kappa < \theta$ なら, 同じく定理の仮定を用いると, $|(右辺)| = |\mathcal{P}(\alpha)| = \left| \bigcup_{\lambda \leq |\alpha|} [\alpha]^\lambda \right| = \sup_{\lambda \leq |\alpha|} |\alpha|^\lambda = |\alpha|^{<|\alpha|^+} \leq ||\alpha|^{<\kappa} < \theta$ となり矛盾. したがって, $\exists x \in \mathcal{A}_1 (j[x] \not\subseteq \alpha)$, つまり $\exists x \in \mathcal{A}_1 \exists \beta \in j[x] (\beta \notin \alpha)$. $j[x] \subseteq j[\bigcup \mathcal{A}_1]$ に注意して, $\exists x \in \mathcal{A}_1 \exists \beta \in j[\bigcup \mathcal{A}_1] (\alpha \leq \beta)$.

□(Claim 2)

各 $x \in \mathcal{A}_1$ について, $j[x] \subseteq \theta$ の下から $\xi (< \gamma_*)$ 番目の要素を $j[x](\xi)$ で表すことにする.

Claim 3. $\exists \xi < \gamma_* (\{j[x](\xi): x \in \mathcal{A}_1\}$ は θ で非有界). すなわち,

$$\exists \xi < \gamma_* \forall \alpha < \theta \exists x \in \mathcal{A}_1 (\alpha \leq j[x](\xi)). \quad (4)$$

[\cdot] 背理法. $\forall \xi < \gamma_* \exists \alpha < \theta \forall x \in \mathcal{A}_1 (j[x](\xi) < \alpha)$ を仮定する. 各 $\xi (< \gamma_*)$ ごとに存在が保証される $\alpha (< \theta)$ のうちの適当な一つを α_ξ で表すことにする. これにより, $\forall x \in \mathcal{A}_1 (j[x](\xi) < \alpha_\xi)$ を満たす集合 $X = \{\alpha_\xi: \xi < \gamma_*\} \subseteq \theta$ を得る. このとき, $\sup X$ は $\{j[x](\xi): x \in \mathcal{A}_1, \xi < \gamma_*\} = j[\bigcup \mathcal{A}_1]$ の上界となる. 今, θ は正則で $\gamma_* < \theta$ なので, $\sup X < \theta$ でなければならない. 以上の考察より $j[\bigcup \mathcal{A}_1]$ は θ で有界となる. これは Claim 2 に反する. □(Claim 3)

Claim 3 で存在が保証される ξ のうち最小のものを ξ_* とする ($\xi_* = 0$ となることもあり得る). 最小性より, $\eta < \xi_*$ では $\{j[x](\eta): x \in \mathcal{A}_1\}$ は θ で有界であることに注意する. すると, θ の正則性と合わせて $\alpha_* := \sup\{j[x](\eta) + 1: x \in \mathcal{A}_1, \eta < \xi_*\}$ について, $\alpha_* < \theta$ となる. また, 定義より明らかに次が成り立つ:

$$\forall x \in \mathcal{A}_1 \forall \eta < \xi_* (j[x](\eta) < \alpha_*). \quad (5)$$

θ までの超限再帰によって, \mathcal{A}_1 の元の列 $\langle x_\mu: \mu < \theta \rangle$ を以下を満たすように定義する:

$$j[x_\mu](\xi_*) > \max(\alpha_*, \sup\{j[x_\nu](\eta): \eta < \gamma_*, \nu < \mu\}). \quad (6)$$

$\{j[x](\xi_*): x \in \mathcal{A}_1\}$ は θ で非有界, θ は正則なので, これは可能である*1. その上で, $\mathcal{A}_2 := \{x_\mu: \mu < \theta\} (\subseteq \mathcal{A}_1 \subseteq \mathcal{A}_0 \subseteq \mathcal{A})$ と定める. $\langle j[x_\mu](\xi_*): \mu < \theta \rangle$ は真の上昇列で j は単射なので, x_μ はそれぞれ互いに異なる. よって $|\mathcal{A}_2| = \theta$ である.

Claim 4. $\forall x, x' \in \mathcal{A}_2 (x \neq x' \rightarrow j[x] \cap j[x'] \subseteq \alpha_*)$.

[\cdot] $x = x_\mu, x' = x_\nu, (\mu > \nu)$ とする. まず, 任意の $\eta \geq \xi_*$ に対して, $j[x_\mu](\eta)$ は $j[x_\mu]$ と $j[x_\nu]$ の共通元とはなりえない. 何となれば, $\eta \geq \xi_*$ ならば, 任意の $\beta < \gamma_*$ に対して $j[x_\mu](\eta) \geq j[x_\mu](\xi_*) > j[x_\nu](\beta)$ である. ここに, “ \geq ” は $\eta \geq \xi_*$ と記法 $j\cdot$ の定め方により, “ $>$ ” は列 $\langle x_\mu: \mu < \theta \rangle$ の定義による. したがって $\beta < \gamma_*$ が如何に走ろうとも $j[x_\nu](\beta)$ は $j[x_\mu](\eta)$ に一致し得ない. 以上の考察より, $j[x_\mu]$ と $j[x_\nu]$ の共通元になり得るのは $j[x_\mu](\eta) (\eta < \xi_*)$ の形の元に限られる. 式 (5) により, $j[x_\mu] \cap j[x_\nu] \subseteq \alpha_*$. □(Claim 4)

集合 $S := \{j[x] \cap \alpha_*: x \in \mathcal{A}_2\}$ を考える. 各 $j[x] \cap \alpha_*$ は α_* の濃度 κ 未満の和集合なので, $S \subseteq [\alpha_*]^{<\kappa}$ が成り立つ. 両辺の濃度を計算すると, 定理の仮定より $|S| < \theta$. 鳩ノ巣論法により, ある集合 $s (\subseteq \alpha_*)$ が存

*1 θ が正則でなければ, 右辺の \sup が θ 以上になり得る.

在して $\mathcal{B} := \{x \in \mathcal{A}_2 : j[x] \cap \alpha_* = s\}$ の濃度が θ でなければならない。この \mathcal{B} が Δ -システムであることを見るために、互いに異なる $x, y \in \mathcal{B}$ をとる。 $x, y \in \mathcal{A}_2$ なので、Claim 4 より $j[x] \cap j[y] \subseteq \alpha_*$ 。よって、 $j[x] \cap j[y] = (j[x] \cap j[y]) \cap \alpha_* = (j[x] \cap \alpha_*) \cap (j[y] \cap \alpha_*) = s \cap s = s$ 。いま、 j は単射なので $j[x \cap y] = j[x] \cap j[y]$ が成り立つことに注意すれば、結局 $j[x \cap y] = s$ 。両辺に j^{-1} を作用させ、 $x \cap y = j^{-1}[s]^*2$ 。よって \mathcal{B} は $r = j^{-1}[s]$ を根とする Δ -システムである。 \square

系 3. \mathcal{A} を、有限集合からなる非可算な集合族とする。このとき、非可算な Δ -システム $\mathcal{B} (\subseteq \mathcal{A})$ が存在する。

Proof. 定理 2 で $\kappa = \omega$, $\theta = \omega_1$ とせよ。 \square

参考文献

- [1] Devlin, K., *The Joy of Sets: Fundamentals of Contemporary Set Theory* (2nd ed.), Undergraduate Texts in Mathematics, Springer, 1993.
- [2] Jech, T., *Set Theory: The Third Millennium Edition, revised and expanded*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, 2002.
- [3] Kunen, K., *Set Theory, An Introduction to Independence Proofs*, Vol. 102. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics, North-Holland, 1980. 邦訳 [13].
- [4] Kunen, K., *The Foundations of Mathematics*, Vol. 19. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2009. 邦訳 [14].
- [5] Kunen, K., *Set Theory* (rev. ed.), Vol. 34. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2011.
- [6] Schindler, R., *Set Theory, Exploring Independence and Truth*, Universitext, Springer, 2014.
- [7] Shoenfield. J.R., *Mathematical Logic*, Addison-Wesley, 1967.
- [8] Takeuti, G. and Zaring, W.M., *Introduction to Axiomatic Set Theory* (2nd ed.), Vol. 1. Graduate Texts in Mathematics, Springer, 1982.
- [9] Weaver, N., *Forcing for Mathematicians*, World Scientific Publishing, 2014.
- [10] 新井敏康, 数学基礎論, 岩波書店, 2011.
- [11] 菊池誠, 不完全性定理, 共立出版, 2014.
- [12] 倉田令二郎・篠田寿一, 公理的集合論, 倉田令二郎監修・数学基礎論シリーズ 2 巻, 河合文化教育研究所, 1996.
- [13] K. キューネン (藤田博司訳), 集合論-独立性証明への案内, 日本評論社, 2008. [3] の邦訳.
- [14] K. キューネン (藤田博司訳), キューネン数学基礎論講義, 日本評論社, 2016. [4] の邦訳.
- [15] 田中一之編・著, 数学基礎論講義, 日本評論社, 1997.
- [16] 田中一之編, ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム, 東京大学出版会, 2007.
- [17] 田中一之・鈴木登志雄, 数学のロジックと集合論, 培風館, 2003.
- [18] 田中尚夫, 公理的集合論, 現代数学レクチャーズ (B-10), 培風館, 1982.
- [19] 田中尚夫, 選択公理と数学-発生と論争、そして確立への道 (増訂版), 遊星社, 2005.

*2 函数 $f : X \rightarrow Y$ が単射であれば、任意の $A \subseteq X$ に対し $f^{-1}[f[A]] = A$.